

令和4年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団	
施 設 名	大分県立総合文化センター (iichiko 総合文化センター)	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業	
内 定 額 (総 額)	21,709	(千円)
	公演事業	21,709 (千円)
	人材養成事業	0 (千円)
	普及啓発事業	0 (千円)

(1) 令和4年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	日本の西洋音楽発祥の地プロジェクト	-	文化庁補助事業との重複応募により、助成対象から取り下げ	目標値	3,250
		-		実績値	-
2	オーケストラ演奏会	① 8月19日(金) ② 11月14日(月)	①森口真司(指揮),九州交響楽団 ②NDR北ドイツ放送フィルハーモニー管弦楽団, A.マンゼ(指揮), G.ヒッツ(ピアノ)	目標値	2,300
		①iichiko グランシアタ ②iichiko グランシアタ		実績値	① 601 ② 655
3	ホール付属 ジュニアオーケストラ 第14回定期演奏会	3月26日(日)	iichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ, 船橋洋介(指揮),水谷晃(ヴァイolin), 大分県立芸術文化短期大学学生	目標値	910
		iichiko グランシアタ		実績値	790

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

社会的役割（ミッション）と地域特性を踏まえて事業を組み立て、新型コロナの影響は一部あったものの、おおむね予定通りに事業を進めた。

<社会的役割と地域特性の把握>

公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団（以下、当財団）の社会的役割（ミッション）は、芸術文化の本質的価値の追求と、人材育成や社会包摂を通じた社会的・経済的価値の実現である。当財団では、日本有数のホール機能を誇る大分県立総合文化センター（以下、当センター）を活用し、異文化受容と文化多様性に富んだ歴史的な地域特性（中世の大友宗麟時代における西洋音楽をはじめとする南蛮文化受容など）を踏まえ、県立美術館、民間施設（ホテル、オフィスなど）と一体整備された施設特性を活かし、そのミッションに取り組んでいる。

<事業の適切な組み立てと予定通りの事業推進>

令和 2 年度より「西洋音楽発祥の地プロジェクト」をスタートさせ、演奏会を通じて、大分県が西洋音楽発祥の地であるという認知を高めるとともに、歴史に根差した地域の活性化やアイデンティティ確立、シビックプライドの醸成を図った。そのため令和 4 年度は、事業番号 2・3 のオーケストラと、事業番号 1 の創作舞台に焦点をあてて事業を組み立てた。

このうち前者については、主催・共催で年間を通し 8 公演実施した。加えてオーケストラの生演奏付きのオペラ等の舞台も、主催・共催で 4 公演実施した（計 12 公演）。後者の創作舞台については、文化庁補助事業との重複応募により、助成対象から取り下げた。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

大分県の芸術文化発信の最大拠点として、ホール機能の優位性を十全に活かし、全国に発信できる質の高い公演や、大分県立芸術文化短期大学および九州交響楽団の協力を得て、創造性に富んだ公演を実施し、助成事業により、文化的、社会的、経済的意義が継続して認められた。

令和 4 年度はオーケストラに焦点をあて、主催・共催で年間を通し 8 公演実施した。加えてオーケストラの生演奏付きのオペラ等の舞台も、主催・共催で 4 公演実施した（再掲）。そのため、まずは 8 月にオーケストラの基本を学んでもらう、レクチャー付きのオーケストラコンサートを開催。夏休みの親子をターゲットにしており、多くの家族が来場した（指揮は大分県立芸術文化短期大学教授、演奏は九州交響楽団）。さらに県の国際政策課と連携し、ウクライナからの避難民を招待し、世界共通語である音楽を楽しんでもらうなど、社会的意義も高い事業であった。

また、11 月には海外オーケストラを招聘した。都市圏に出向かずとも県内で海外オーケストラを鑑賞できるようにすることは、当センターの使命の一つであり、文化面での地域間格差是正に寄与する。9 年振りの海外オーケストラ、ソリストのゲルハルト・オピッツも 14 年振りの来県ということで、県民の期待・ニーズが非常に高まっており、令和 5 年度の休館前に、優れた音響を誇るホールの優位性を最大限に活用し、多くの県民に楽しんでいただいた。1 週間後の福岡公演とは全く異なる演奏プログラムとすることで、来場者の競合回避を図った。新型コロナの影響もあるなか、県外からも一定程度の来場者があり（2.7%）、来場者の消費行動（移動や飲食等）や演奏者の宿泊などによる地域経済への波及効果があった。

結成 14 年目のホール付属のジュニアオーケストラは 3 月に公演を開催。交響詩『フィンランディア』を演奏し、平和について考える機会となっただけでなく、大分市出身の東京交響楽団コンサートマスター（当時）水谷晃氏と共演することで、実際にリハーサル中に、団員の音色がよくなっていくなど、多くの刺激が得られた。

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

<目標①> 大分県が「西洋音楽発祥の地」であるという認知度を高めて、地域を誇る気持ちが高まったと感じる人を増やす。

指標 『大分県が「西洋音楽発祥の地」である知っている』との回答を全体の80%以上とする。

実績 「西洋音楽発祥の地」の認知度 44.5% (未達成)

特に、中高生の来場が多いジュニアオーケストラ定期演奏会(事業番号3)で認知が広がっておらず、目標は未達成となった。そこで、大分県が「西洋音楽発祥の地」であることや、クラシック音楽の歴史背景を、まずジュニアオーケストラの団員に説明して知識を深めてもらうとともに、定期演奏会等で説明チラシを配布して多くの中高生に知ってもらう取り組みを行った。今後の認知の広がりに期待したい。

<目標②> 若年層の来場者を増加させる。

指標 20代以下の来場者を18%以上とする。

実績 20代以下の来場者率 25.0% (達成)

助成対象の全3公演で25歳以下の割引や学生券を設定するとともに、若年層の無料招待枠を設けることで多くの若年層が来場した。また、レクチャーコンサートを夏休みに開催したことで、多くの家族が来場し、クラシック音楽への興味や理解を深めた。この結果、今回の実績は、令和3年度実績11.9%と目標18%をともに大きく上回った。

<目標③> 質の高い公演を行うことによって、来場者の満足度を向上させる。

指標 公演が『大変満足』『満足』と回答する来場者が94%以上になる。

実績 来場者の満足度 92.9% (未達成) (分母となる総数に無回答者を含む。無回答者を除くと98.0%)

長引くコロナの影響で来場者は伸びていないが、来場者アンケートでは、いずれも満足度の高い公演であったとの評価を得ている。海外オーケストラ公演は、大分では9年ぶりの開催であり、レクチャーコンサートもオーケストラや曲に対する理解が深まったと、多くの来場者から好評を得た。

<目標④> ウィズ・コロナのなか、安心・安全に鑑賞してもらう環境を整備する。

指標 『安心して鑑賞できた』との回答を全体の90%以上とする。

実績 『安心して鑑賞できた』と答えた来場者の比率 98.9% (達成)

ガイドラインに基づく感染症対策を徹底した運営を行い、アンケート調査では、来場者から安心して鑑賞できたという評価を得た。

特に令和4年8月はオミクロン株による第7波が猛威を振るっており、県内でも8月17日(事業番号2の2日前)に県内コロナ陽性者が3,000人を超えていたが、基本に立ち返って対策チェックリストを再確認し、対策を徹底することで、安心・安全な鑑賞環境を実現した。

<まとめ>

大分県立総合文化センターは、大分県の芸術文化発信の最大拠点として、ホール機能の優位性を十分に活かし、感性・創造性を育み、大分の歴史文化に根ざした質の高い実演芸術の公演に取り組むことを目指している。

令和4年度事業においては、上記①～④の4つの目標を掲げて運営に取り組み、そのうち②③④の3つで目標を達成した。未達成の①においても、演奏会の来場者等に向けて、大分県が「西洋音楽発祥の地」であることを情報発信して、認知の拡大に努めている。

当センターは令和5年度、大規模修繕でホールを休止するが、その前に、世界最高水準の海外オーケストラを招聘したことで、ホール再開に向けた県民からの期待の維持・拡大に寄与しえたと判断する。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業期間は適切で、おおむね当初の計画通りに進んだと評価できる。

■事業番号2 オーケストラ演奏会

オーケストラ付きのレクチャーコンサートでは、指揮を大分県立芸術文化短期大学教授に、管弦楽演奏を九州交響楽団に依頼することで、制作打合せやリハーサルなど、効率的な実施ができた。

海外オーケストラで要望時に計画していたドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団は、来日中の公演スケジュールの都合がつかず、大分公演での開催を断念。代替として、NDR北ドイツ放送フィルハーモニー交響楽団を、9年ぶりの海外オーケストラ公演として、そしてホール休止前の目玉公演として開催した。公演の開催時期は12月上旬から、11月14日に変更となった。

■事業番号3 ホール付属ジュニアオーケストラ第14回定期演奏会

今回演奏したシベリウスの交響曲は、中高生には難度が高く、さらに夏のリハーサル中止やリモートでのレッスンなど、様々な制約もあり、仕上げるまでに例年よりも時間を要したが、年明け以降、指揮者や外部特別講師のレッスンを重ねることで、飛躍的に上達し、公演では極めてレベルの高いパフォーマンスが実現した。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、一部事業で新型コロナや国際情勢の影響があったものの、事業費は適切で、おおむね当初の計画通りに進んだと評価できる。

■事業番号2 オーケストラ演奏会

オーケストラ付きのレクチャーコンサートは、オミクロン株による第7波渦中での開催となり、会場設営や運営補助の人員を増員して感染症対策を徹底したが、事業期間の欄に記載したとおり、地域のアーティストとともに制作することにより、事業費全体としては効率的な執行ができた。

海外オーケストラは円安ユーロ高や国際情勢により、出演料や渡航費に影響があったが、予算の範囲内で執行することができた。

■事業番号3 ホール付属ジュニアオーケストラ第14回定期演奏会

チラシをはじめとする印刷物は、安価なネット印刷を利用し、経費節減に努めた。また、レンタル楽譜や特殊楽器、ピアノ調律が必要な楽曲の選曲がなかったほか、賛助出演者についても楽団OBや大分県立芸術文化短期大学の学生を起用することにより、事業費を抑えることができた。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

大分県立芸術文化短期大学との協定や九州交響楽団とのネットワーク、当センターが有するわが国有数のホール機能という、ソフト、ハード両面のリソース（資源）を最大限に活用し、芸術性・独創性の高い企画を実現して県民に鑑賞をいただいた。

■事業番号2 オーケストラ演奏会

○オーケストラ付きのレクチャーコンサート

子どもたちの鑑賞・体験環境を拡充し、芸術文化の未来のファン・担い手を育てるため、海外オーケストラ公演を見据え、オーケストラや楽曲に関する教養や知識を高めるための解説やお話を交えた初心者向けのコンサートを計画した。

地元の指揮者（大分県立芸術文化短期大学教授・森口真司氏）と地元の楽団である九州交響楽団と一緒に制作した、オリジナルの企画。コロナの第7波が猛威を振るうなか、601名が来場し、「レクチャーによりドヴォルザークの作曲の工夫、聴き所がわかり、交響曲『新世界より』の魅力が深まった。」「オーケストラに興味を持った、九州交響楽団の演奏を集中して興味深く楽しんだ。」という内容の声が多く寄せられ、今後もこのような企画を望む声が寄せられた。また、夏休み期間の開催ということで、多くの親子が来場し、子どもたちに鑑賞機会を提供した。

大分県立芸術文化短期大学や九州交響楽団とのネットワークという強みを最大限に発揮した公演となった。

○海外オーケストラ公演

海外オーケストラに対する県民ニーズに応えるため（会館友の会会員の56%が希望）、県内9年ぶりとなる本格的な海外オーケストラ公演として、NDR北ドイツ放送フィルハーモニー交響楽団の公演を計画した。

古楽器奏者でもあるアンドリュウ・マンゼが指揮を執り、12年ぶりの来県となるドイツ正統派ピアニストのゲルハルト・オピッツとともに、オール・ベートーヴェンのプログラムにて開催した。来場者からは「とても良かった。大分でこんなコンサートがこんな料金で聴けるのは嬉しい。」「久しぶりにヨーロッパ的オーケストラ演奏を聴けて満足した。フレーズの取り方がさすが。」「まるで1人が大きいヴァイオリンを弾いているかのように一体感があり凄く感動した。」など、多くの賛辞が聞こえ、県民の期待に応えるとともに、音響が高く評価されている当会館の機能を最大限に発揮した公演となった。

■事業番号3 ホール付属ジュニアオーケストラ第14回定期演奏会

芸術文化の人材養成を目的とするジュニアオーケストラの技能向上を図るため、中央で活躍するプロの指揮者（宮城学院女子大学教授・船橋洋介氏）を招聘し指揮者レッスンを行うとともに、プロオーケストラの奏者（東京交響楽団コンサートマスター（当時）・水谷晃氏、金管五重奏団 BuzzFive メンバー5名等）を招聘し特別レッスンを行う活動を計画した。

年間の日程は、4月から始まり毎月第2・第4日曜日を練習日とし、翌年3月下旬の第14回定期演奏会を目標に年間計18回の練習を行った。この内、指揮者レッスンは年度後半の11月、2月、3月に計6回行い、船橋氏の丁寧かつ熱心な指導により、団員の演奏への集中力において大きな成長が見られた。また、奏者による特別レッスンは12月、1月、2月、3月に計6回行い、水谷氏ほかの高度なプロ意識で牽引する指導により、団員の意識・技能、アンサンブル力が急速に高まった。これらの指導により、定期演奏会においては難度が高いシベリウスの楽曲を、高い芸術性をもって完成させ、来場者からは「レベルの高さ」「素晴らしい」等の感想をいただく成果を得た。

本県のジュニアオーケストラの芸術監督・音楽監督は県立芸術文化短期大学音楽科の教授陣が務めており、本県の芸術教育機関を最大限に活用しオーケストラの運営を行っている。また、チラシ・ポスターやテレビCM・新聞広告等により定期演奏会の告知を行うとともに県内唯一のジュニアオーケストラの広報にも努めている。このような本事業を実施することにより、音楽堂として芸術文化の人材を養成する役割を果たすとともに、本県の文化拠点としての機能を最大限に発揮している。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

県内の実演芸術の振興、文化芸術の発展に資するため、児童生徒や学生の芸術（音楽）に関する意識、知識等を高める公演を企画した。また、財団友の会アンケートの要望に応え、海外オーケストラを招聘した。今後も県民の期待・ニーズを来場者アンケート等で把握し、次の企画に反映させていく。

■事業番号2 オーケストラ演奏会

2公演ともに、当センターの中高生等劇場招待事業により、オーケストラに所属する学生や吹奏楽部の生徒を中心に、合計126名を招待した。また、小学生招待事業により、レクチャーコンサートでは小学生41名を招待した。

○オーケストラ付きのレクチャーコンサート

レクチャーコンサートのアンケートでは、「レクチャーにより楽曲に対する理解度が増し、大変感動した。また聴きたい。」「実際の演奏を聴きながらの解説は迫力があつた。」「息子から行きたいと言われ値段も手頃だったので行った。普段クラシック音楽に親しむ方ではなかったので、レクチャーも面白かつたし非常に興味深く最後まで拝聴する事が出来た。生のオーケストラもすごく良かった。感動した、と高校生の息子も大満足していた。」「レクチャーコンサートを年一回くらいでももらえたらもっと楽しめる。」「12月の(自分たちの)定期演奏会で(同じ曲を)演奏する予定。気づいていないことが多かつたため、とても参考になつた。」などの声が多数寄せられ、地域の文化芸術の発展につながつた。

○海外オーケストラ公演

海外オーケストラのアンケートでは「吹奏楽部でコントラバスをしている。手本となれるものが今までなかなか見つけられなかつたが、今回見つけた、明日から練習頑張ります。」「指揮者に見入つたのはあまり経験がない。音も演目の性格もあるのかもしれないがとてもシャープ。ピアノもオケもかっこよくて元気になつた。」など、オーケストラに所属する学生や吹奏楽部の生徒の声が寄せられ、地域の実演芸術等の振興と地域の文化芸術の発展につながつた。今回の開催について、多くの来場者から支持があつたため、今後も定期的に海外オーケストラ公演を開催していきたい。

■事業番号3 ホール付属ジュニアオーケストラ第14回定期演奏会

ジュニアオーケストラの芸術監督・音楽監督は県立芸術文化短期大学音楽科の教授が、また各パートの指導は同学科の講師が務めている。加えて第14回定期演奏会では同学科の学生が賛助として練習に参加し出演した。賛助出演の学生にとっては、大分市出身の東京交響楽団コンサートマスター(当時)・水谷晃氏とのリハーサル練習、出演は、多くの刺激を受ける貴重な経験となつた。また、この定期演奏会に続き、水谷晃氏は大分県内で開催される「ゆふいん音楽祭」への参画や「別府市民フィルハーモニア管弦楽団」との共演を行うこととなり、地域の実演芸術の振興の輪が広がっている。

第14回を迎えた定期演奏会は、団員の家族や知人の来場とともに、当センター友の会会員なども惹き付ける演奏会になっている。アンケートでは「ジュニアと思っていたが素晴らしかつた。」「レベルの高さに驚き、さらにレベルアップを期待。」等の声が多数寄せられた。

以上のように、当事業の定期演奏会により、県内の実演芸術家・団体へ波及効果を及ぼし、その振興につながるとともに、ジュニアオーケストラファンが出来てくるなど地域の文化芸術の広がりにつながっている。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

■事業番号2 オーケストラ演奏会

<事業運営>

音響構造に優れる当センターのホールの優位性を活かして芸術性やオリジナリティの高いクラシックコンサートを実施する事業運営を行っている。平成10年の開館以来、大分県では唯一、海外オーケストラを招聘できるホールとして定着しており、コロナ禍で中止、延期していた海外オーケストラの公演を計画し、令和4年度は無事実施(11月)することができた。また令和4年度はオーケストラ公演を8公演(主催・共催)実施することとしていたため、子どもや初心者にもオーケストラと楽曲の魅力をわかりやすく解説するオーケストラ付きのレクチャーコンサート(8月)を自主企画し活動計画に盛り込み、後続するオーケストラ公演の集客と親子を含む新たなファン層の拡大につなげる事業運営を図ることができた。

<経営戦略>

経営面においては、当センターの属する財団は中期経営戦略計画を策定しており、各年度で収入支出の増減が大きく振れないよう平準化し持続運営を可能とする経営戦略をとっている。また当該年度の活動計画においても、経費が大きい海外オーケストラと自主企画を組み合わせ経営面の安定を図っている。

<人事戦略>

事業の計画立案、実施(実行)にあたっては、研修として海外オーケストラを視察し、広い知見を有する職員を担当とし、担当職員を中核として館長及び担当部署全員が担当職員を支えて事業実施する体制をとった。担当部署においては公演経験歴に応じて実務を分担し、経験が少ない職員にOJTの形で実施ノウハウを学ばせ人材育成を図っている。

<ネットワークの構築>

自主企画のオーケストラ付きのレクチャーコンサートについては、地元の県立芸術文化短期大学の教授による解説・指揮を依頼するとともに地元の九州交響楽団に演奏を依頼し、当センターのネットワークを十分に活用し、県内でなじみのある指揮者と楽団による公演を実施できた。

<まとめ>

レクチャーコンサートのアンケートでは、「小学生が音楽にふれる良い機会」「わかりやすく楽しかった、後半の演奏が楽しかった」「解説付きの企画は良い、またの企画を楽しみにしている」等、今後もレクチャー付きの企画を望む声が多く寄せられた。海外オーケストラのアンケートでは、「欧州オケの表現力」「本場ドイツのベートーヴェンプログラム」、演奏の見事さや指揮のシャープさなどを称える感想が寄せられた。以上のアンケート結果を分析し、レクチャー・指揮を行った地元の県立芸術文化短期大学の教授とも共有し、今後の事業企画に活かし、さらなるクオリティの向上と集客アップを図っていく。

■事業番号3 ホール付属ジュニアオーケストラ第14回定期演奏会

<事業運営、ネットワークの構築>

ジュニアオーケストラの事業運営は、年度末3月の定期演奏会を目指して、団員が4月から練習を積み上げるといった教育プログラム。そのため県内の芸術文化の教育機関である県立芸術文化短期大学音楽科と連携し、芸術監督・音楽監督、各パートの講師を依頼している。他方、ジュニアオーケストラ側からは団員が同短大音楽科に進学するなど、当センターと同短大とが相まって、県内の芸術文化の人材育成(教育)に取り組んでいる。

<経営戦略>

経営面においては、「iichiko」のネーミングライツ契約を締結している三和酒類株式会社からの支援をはじめ、さまざまな地元企業から支援を受けている。

<人事戦略>

ジュニアオーケストラ事務局の体制については、当センターの担当課(企画普及課)全員でチームとして対応し、情報を共有するとともに、各業務に主担当と副担当を割り当て、知識・経験の継承に努めている。

<まとめ>

上記の項目に取り組むとともに、ジュニアオーケストラの広報や楽器演奏体験・オーケストラ参加体験のイベントを開催し、ジュニアオーケストラ事業と組織活動の持続的発展を図っている。